

心理面接における動的家族画・家族イメージ法の活用 — 課題の非構造的・半構造的特徴に注目して —

原田 雪子¹⁾

石田 弓²⁾

内海 千種³⁾

Study on the use of Kinetic Family Drawings and Family Image Test in the psychotherapy: Focusing on the theme which has non-structural stimulus or half structural stimulus.

Yukiko HARADA¹⁾

Yumi ISHIDA²⁾

Chigusa UCHIUMI³⁾

Abstract

In this paper, to clarify the use of Kinetic Family Drawings (KFD) and Family Image Test (FIT) in the psychotherapy, family's characteristics that both techniques were made to notice were examined by focusing on the difference of the stimulation structure. As a result, there is no difference in the matter noticed about "family members' characteristics", "relations of family members", and "episodes concerning a family" as for KFD and FIT. Therefore, it has been understood to be able to notice these matters even by each technique in the psychotherapy. It is easy for FIT with half structural stimulus to notice specific family feature. It is easy for KFD with non-structural stimulus to notice about various matters of the family from the past to the future.

Moreover, the difference of feature of the family interpreted by KFD and FIT was clarified, and the possibility as the test battery was examined. As a result, it is easy for KFD with non-structural stimulus to understand concrete family feature in various situations. On the other hand, it was clarified that family's basic characteristic was understood by FIT with half structural stimulus. Therefore, the method for the commentary use of both techniques was suggested. For instance, FIT can be effectively used to understand family's basic characteristic, and KFD is more effective to understand a detailed feature and the originality of the family.

Key words: 動的家族画, 家族イメージ法, 心理面接, 家族力動, 家族システム

1) 医療法人おくら会藤戸病院 Fujito Hospital

2) 広島大学大学院教育学研究科附属心理臨床教育研究センター Training and Research Center for Clinical Psychology, Graduate School of Education, Hiroshima University

3) 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima

I 問題と目的

1. 家族をテーマとした心理面接の特徴

心理臨床場面では、家族のテーマが展開されることが多い。それは、ある個人の悩みや問題はその人を取り巻く人間関係の影響を少なからず受けているからである。特に家族関係は性格、価値観、感情、行動など、個人のあらゆる面に大きな影響を及ぼしている。

家族の問題を取り上げる場合、家族関係の問題に直面しなくてはならない。しかし、心理面接の中で問題に直面することは時として難しい。植村(1989)は、その難しさについて以下のように述べている。

現実問題として、家族の中に潜んでいる心的問題について保護者と話し合うことは難しい。(中略)故意に話をそらしてしまうことが多い。これは、担任と保護者との間に十分なレポートが形成されていないこと、保護者の方に防衛機制が働いていること、などが考えられる。下手に話を持ちかけると、かえって逆効果になってしまう恐れがある。不用意に心の領域に足を踏み入れることは、非常に危険なことである。しかし、危険だからといって手をこまねいているとさらに大きな問題が引き起こされる恐れがある。

このように家族関係に焦点を当てようとした場合に、クライアントは意識的・無意識的に家族関係を取り上げることが回避することがある。このような場合、心理面接の補助手段として用いられる技法に動的家族画(Kinetic Family Drawings: KFD)がある。これまで医療、教育、福祉など様々な心理臨床場面で用いられ、家族関係のアセスメントに有用であることが示されてきた。一方、近年注目されている家族システム論の観点から作成された家族イメージ法(Family Image

Test: FIT)も心理面接の補助手段としての有用性が報告されている。

2. 動的家族画と家族イメージ法の相違点 - 課題の内容、理論的背景 -

KFDは家族に関する心理アセスメント法として日比(1973)によって日本に紹介された臨床描画法である。「あなたを含めて、あなたの家族のみんなについて、何かしているところを絵に描いてください」と教示され、A4判の画用紙に鉛筆または色鉛筆で描かれる。そして、人物像の特徴や行為の内容、描写された事物から対象者のとらえている家族像が解釈される。また、心理面接の中では、クライアントは描画に自己概念に関するものを投射し、対人関係の領域における感情が引き出されるとされている(Burns & Kaufman, 1972)。

一方、FITは家族アセスメント法や心理的援助のためにKveback(1980)が開発したFamily Sculpture Techniqueを亀口ら(1988)が日本の家族向けに修正した技法であり、改訂を重ね、現在の形式となった(亀口, 2003)。対象者は作成前に「シールの色」、「シール間の線」、「シールの向き」のもつ意味を伝えられ、15cm×15cmの枠内に家族成員を表す円形シールを配置することで、対象者がイメージしている家族像を二次元平面に表現するように教示される(図1, 表1)。また、「シール間の距離」や「シールの高さ」についての教示はないが、これらには無意識的な家族力動が投射されると考えられている。FITは心理アセスメント法としての研究が進んでいるが、心理面接のなかでは、家族メンバーがそれぞれFITを行い、完成した家族イメージを家族メンバー同士で確認しあうことで、家族関係の変容を促すという面接の補助手段として用いられた事例も報告されている。

KFDとFITでは、その理論的背景に違いがみられる。KFDはBurns &

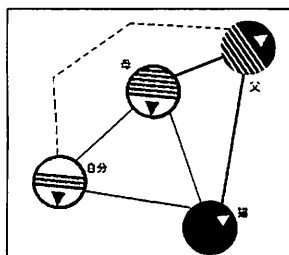


図1 FITの作成例

表1 FITの各項目がもつ意味

シールの色(5段階)	パワー(発言力・影響力・元気のよさ等)
シールの向き	・内向き→家族に関心が向いている ・外向き→家族以外に関心を向けている
シール間の線(2段階)	2者間の心理的結びつきの強さ
シール間の距離(1mm単位)	2者間の心理的距離
シールの高さ(3段階)	家族内での地位

Kaufman (1970) によって考案されたものであり、精神分析学の観点から描画の解釈が行われている。また、日比(1986)はKFDの解釈をLewin, K.の場の理論に求め、自分自身を含んだ家族関係に対する対象者の認知の構えに焦点を当てている。

一方、FITは家族療法における家族システム論の観点から作成されている。亀口(1988)によると、家族内相互作用を家族システム全体の力動的視点からとらえるために、家族内対人関係を外在化する判断基準として、家族成員間の心理的距離に注目し、各家族メンバーの家族に対する認知の変化をとらえる手段として開発された。そのため、家族メンバーのパワーや家族メンバー間の心理的距離など、家族システムの観点から解釈が行われる。

3. 動的家族画と家族イメージ法によって生じる気づき

KFDの課題(教示)は自由度が高く、非構造的な刺激であるといえる。そのため対象者が表現する家族イメージは幅広く、各家族の独自性が表現されやすいことから、家族に関する気づきも幅広く多様なものになると考えられる。

一方、FITには「シールの色」がもつ意味のように教示される項目と、「シール間の距離」がもつ意味のように教示されない項目があることから、半構造的な刺激であるといえる。そして、クライアントは家族の捉え方を家族のパワーや心理的距離といった概念にまとめることで、自らの家族イメ

ージの特徴を読みとることも可能である。しかし、家族イメージの表現される幅はKFDよりも狭く、限定されている。

こうした刺激構造の違いから、KFDとFITの作成過程や作成後に得られる家族に関する気づきには、相違があることが推察される。例えば、KFDでは非構造的な刺激によって気づきが広がりやすく、多岐に渡ると考えられる。一方、FITは半構造的な刺激であるため、対象者の気づきもある程度限定されたものとなる可能性がある。このようにKFDとFITによる気づきについて整理することは、セラピストがクライアントに何らかの家族に関する気づきを促すことを目的にKFDやFITを用いる際に役立つと思われる。しかし、これまでの研究ではKFDとFITによって得られる気づきの性質については明らかにされていない。よって本研究では、KFDとFITによってもたらされる気づきの特徴を整理することで、心理臨床場面におけるKFDとFITの活用法について検討することを目的とする。

4. 心理アセスメント法としての動的家族画と家族イメージ法の違い

刺激構造に違いがあることから、KFDとFITからセラピストが読みとることのできるクライアントの家族の特徴にも違いがあると思われる。KFDでは具体的な状況が描かれることにより、表情や家族の雰囲気など具体的な家族の特徴を読みとることができると思われる。一方、FITでは半

構造的刺激によって家族イメージが比較的簡易にまとめられるため、セラピストは基本的な家族力動を読みとることができると考えられる。このように表現される家族の特徴に違いがあるとすれば、両技法の特徴を活かしてテストバッテリーとして使用することも可能であると推察される。しかし、両技法をテストバッテリーとして用いる試みについては研究されていない。よって本研究では、KFDとFITから読みとることのできる家族の特徴の異同を明らかにし、テストバッテリーとしての可能性についても検討することを目的とする。

5. 本研究の目的

本研究では、KFDとFITの刺激構造の違いに注目し、心理面接における活用法を明らかにするため、以下の2つの研究目的を設定した。まず、KFDとFITによってもたらされる気づきの特徴を整理することで、心理臨床場面におけるKFDとFITの活用法について検討することとした(目的1)。次にKFDとFITから読みとることのできる家族の特徴の異同を明らかにし、テストバッテリーの可能性について検討することとした(目的2)。

II 方法

1. 対象者

A大学の学部生、大学院生30名(男性13名、女性17名)。

2. 調査内容

1) KFD

「今からあなたを含めて、あなたの家族が何かをしているところを描いてもらいます。どんな場面でもかまいません。絵の上手下手は関係ありませんので、自由に描いてください」と教示し、A4判の画用紙に4Bの鉛筆を使用して描かせた。

2) FIT

亀口(2003)が作成したFIT用の

検査用紙とシールを用いた。検査用紙に書いてある手続きを対象者に読ませ、随時作成させた。

3) 気づきに関する自由記述式質問紙

家族に関する気づきについて自由記述形式で回答させる質問紙を作成した。記述させる家族は、同居・別居に限らず、対象者の親、きょうだいに当たる家族メンバーに限定した。

3. 手続き

調査は対象者1名に対して2回(1回45分~90分)行った。1回目は対象者にKFD(またはFIT)を5分~30分で作成させた。その後、KFD(またはFIT)の作成中や作成後の気づきについて質問紙に回答させた。2回目は1回目の調査から2週間以上の間隔を開けて実施した。まず、対象者にFIT(またはKFD)を5分~30分で作成させ、その後、FIT(またはKFD)の作成中や作成後の気づきについて質問紙に回答させた。カウンターバランスを取るために、対象者の半数は1回目にKFD、2回目にFITを行い、残りの対象者には、逆の順番(FIT→KFD)で行った。

III 結果

1. 動的家族画と家族イメージ法による気づきの分類

KFDとFITの作成中や作成後に得られる対象者の気づきの異同を明らかにするため、自由記述の内容を分類した。分類は評価基準が明確な場合には筆者が行ったが、筆者の主観が評定に影響しやすい場合には、臨床心理学を専攻している大学院生2名に評定を依頼した。

1) 「家族メンバーの特徴」について

「家族メンバーの特徴」に関する気づきについて分類を行った。これは家族メンバーの性格や行動、外見などに関する気づきが記述されているものとした。KFDとFITの「家族メンバーの特徴」を分類し(図2, 3), その

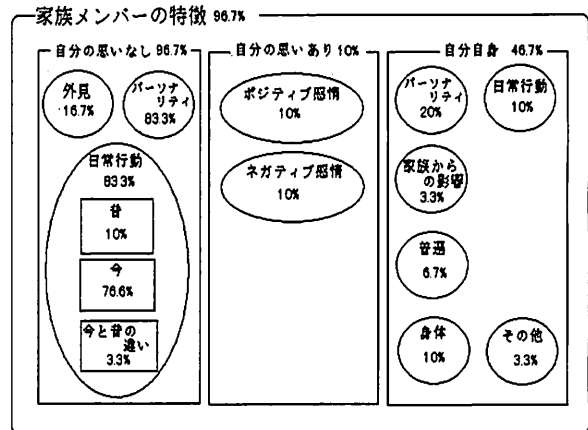
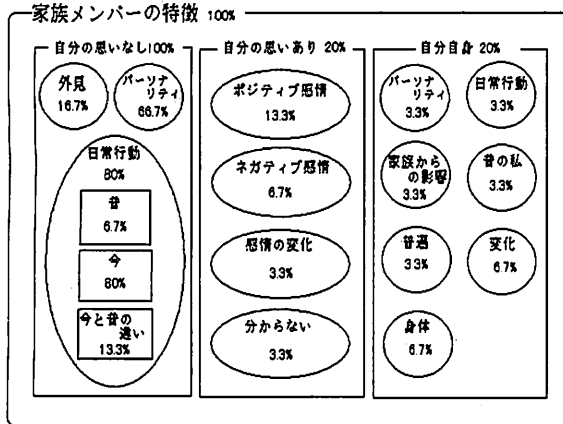


図2 KFDにおける「家族メンバーの特徴」への気づき

図3 FITにおける「家族メンバーの特徴」への気づき

表2 「家族メンバーの特徴」の下位分類の用語についての説明

「自分の思いなし」				
自分以外の家族メンバーについて記述しているが、そのことに対する自分の思いは記述されていないもの(例: 休日、父はソファで寝ていることが多い)				
「外見」	「パーソナリティ」	「日常行動」		
家族メンバーの外見について記述したもの	家族メンバーのパーソナリティについて記述したもの	家族メンバーが日常生活で見せる行動について記述したもの		
		「昔」	「今」	「昔と今の違い」
		昔の日常行動について記述したもの	現在の日常行動について記述したもの	昔と現在の行動の違いについて記述したもの
「自分の思いあり」				
自分以外の家族メンバーの特徴についての記述と、それに対する自分の思いが記述されたもの(例: 母はいつも私の心配をしている。私はちょっと嫌だと思ことが多い)				
「ポジティブ感情」	「ネガティブ感情」	「分からない」		
家族メンバーの特徴に関して、ポジティブな感情について記述したもの(例: うれしい)	家族メンバーの特徴に関して、ネガティブな感情について記述したもの(例: うっとうしい)	自分の感情を「分からない」と記述したもの(例: なぜあんなに一生懸命なのか分からない)		
「自分自身」				
対象者自身の特徴について記述したもの				
「パーソナリティ」	「日常行動」	「家族からの影響」	「昔の私」	
対象者のパーソナリティについて記述したもの	自分が日常生活の中で行っている行動について記述したもの	自分の特徴に関して、家族からの影響を記述したもの(例: 私の性格がまじめなところは、母に似ていると思う)	以前の自分について記述したもの(例: 小さい頃の私は活発でいろんな人に迷惑をかけていた)	
「自分自身」				
「普通」	「変化」	「身体」	「その他」	
以前の自分と現在の自分の変化がないことについて記述したもの(例: 私がよくしゃべるところは昔から変わっていない)	以前の自分と現在の自分の変化について記述したもの(例: 昔の私は落ち着きがないとよく言われたが、今は大人しいと思う)	自分の身体面について記述したもの(例: 私はよく風邪を引き、身体が弱かった)	他の分類に当てはまらないもの	

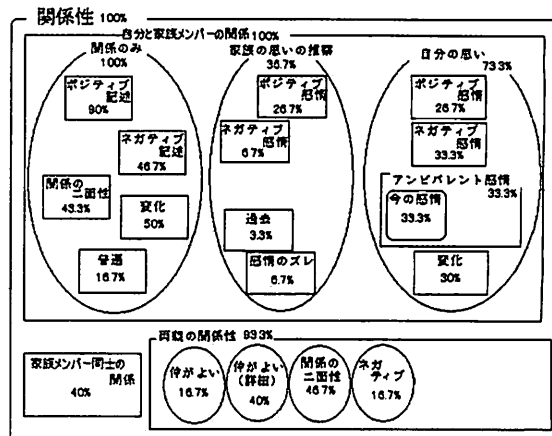
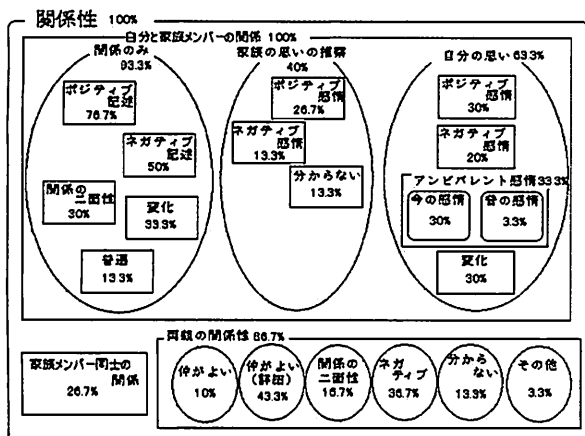


図4 KFDにおける「関係性」への気づき

図5 FITにおける「関係性」への気づき

表3 「関係性」の下位分類の用語についての説明

「自分と家族メンバーの関係」				
対象者と家族メンバーの関係について記述したもの				
「関係のみ」				
関係性について記述されているが、対象者や家族メンバーの感情は記述されていないもの(例: 私と姉は仲がいい)				
「ポジティブ記述」 関係性に関してポジティブな内容について記述したもの	「ネガティブ記述」 関係性に関してネガティブな内容について記述したもの	「関係の二面性」 関係性のポジティブ、ネガティブの両側面について記述したもの(例: 弟と私はけんかしたときは全く話さないが、普段は趣味のことでよく話をする)	「変化」 以前と現在の関係性の変化について記述したもの	「普遍」 以前と今の関係性の共通点について記述したもの
「自分と家族メンバーの関係」				
「家族の思いの推察」				
関係性の記述とともに自分以外の家族がどう思っているかに関する推察について記述したもの(例: 妹はうっとうしいと思っているだろう)				
「ポジティブ感情」 自分以外の家族メンバーのポジティブな感情を推察して記述したもの	「ネガティブ感情」 相手のネガティブな感情を推察して記述したもの	「分からない」 家族メンバーの思っていることが分からないと記述したもの	「過去」 以前の相手の感情を推察して記述したもの	「感情のズレ」 自分と相手の感情のズレについて記述したもの
「自分と家族メンバーの関係」				
「自分の思い」				
関係性に関する自分の思いについて記述したもの(例: 私は父に遊びにつれて行ってもらうことが楽しみだ)				
「ポジティブ感情」 関係性に関してポジティブな感情について記述したもの	「ネガティブ感情」 関係性に関してネガティブな感情について記述したもの	「アンビバレント感情」 関係性に関して2つの相反する感情について記述したもの		「変化」 以前と今の感情の変化について記述したもの
「今の感情」 現在のアンビバレント感情について記述したもの		「昔の感情」 以前のアンビバレント感情について記述したもの		
「家族メンバー同士の関係」				
自分を除く家族メンバー同士の関係について記述したもの				

下位分類における用語を表2で説明した。

「家族メンバーの特徴」についての気づきは、KFD, FITともにほぼ全員が記述していた。下位分類においても「自分の思いなし」では、両技法ともほぼ全員が気づきを得ていた。「自分の思いなし」の下位分類の中で比較的多数が記述していた項目は、KFD, FITともに「パーソナリティ」と「日常行動」に関するものであった。「自分の思いあり」について記述していた対象者は、KFD, FITともに少数であった。「自分自身」に関しては、FITではほぼ半数が気づきを得ていたが、KFDでは半数に満たなかった。「自分自身」についてさらに細かく分類を行ったところ、自分の「パーソナリティ」ではKFDよりもFITの方が多く記述されていた(KFD3.3%, FIT20%)。

2) 家族メンバー同士の「関係性」について

家族メンバー同士の「関係性」に関する気づきについて分類を行った。KFDとFITの「関係性」を分類し(図4, 5), その下位分類における用語を表3で説明した。

「関係性」に関しては、KFD, FITともに全員が記述していた。「関係性」の中でも「自分と家族メンバーの関係」では、両技法とも全員が記述しており、その中でも「関係のみ」に分類されるものが多かった(KFD93.3%, FIT100%)。また、「関係のみ」の下位分類では、両技法ともポジティブな関係性が記述されたものが多かった(KFD76.7%, FIT90%)。「自分と家族メンバーの関係」の下位分類である「家族の思いの推察」について記述しているものは、両技法とも多くなかったが、ほぼ同数であった(KFD40%, FIT36.7%)。「家族の思いの推察」の下位分類では、KFDにおいて「分からない」という項目が作成されたが、FITではみられなかった。「自分と家族メンバーの関係」の下位分類である「自

分の思い」では、両技法ともほぼ同数であり(KFD63.3%, FIT73.3%), 下位分類にも差はみられなかった。「両親の関係」については、多くの対象者が両技法で記述していたが(KFD86.7%, FIT93.3%), 下位分類の「関係の二面性」と「ネガティブ」の項目には違いがみられた。「関係の二面性」については、KFDでは16.7%しか記述していなかったが、FITでは約半数(46.7%)が記述していた。「ネガティブ」では、KFDで36.7%が記述していたが、FITでは16.7%しか記述していなかった。

3) 「家族に関するエピソード」について

「家族に関するエピソード」についての気づきを、対象者が現在エピソードをどのように捉えているかを中心に分類した。KFDとFITの「家族に関するエピソード」の分類を示し(図6, 7), その下位分類における用語を表4で説明した。

「家族に関するエピソード」については、KFD, FITともにほぼ同じ分類となり、自らの教訓や経験となったエピソードについての記述(「学んだこと」, 「これから先〇〇したい」)が多かった。また、「感謝」がKFDよりもFITでやや多くみられた(KFD3.3%, FIT16.7%)。

4) その他の分類

「家族メンバーの特徴」, 「関係性」, 「家族に関するエピソード」以外に作成された分類項目の中で特徴的な分類についての結果を記述した。

「家族全体の特徵」(対象者の家族全体の特徵についての記述)では、KFDよりもFITの方が記述しているものがわずかに多かった(KFD76.7%, FIT93.3%)。その下位分類では、家族「全体」(家族全体の特徵をまとめて記述しているもの。例:「私の家族はうるさい」)の「変化」(以前と現在の家族の特徵の違いを記述しているもの。例:「私の家族は以前よりも静か

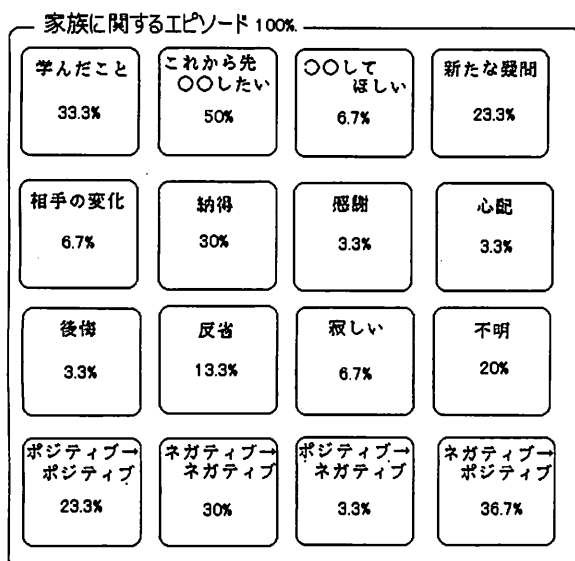


図 6 KFDにおける「家族に関するエピソード」への気づき

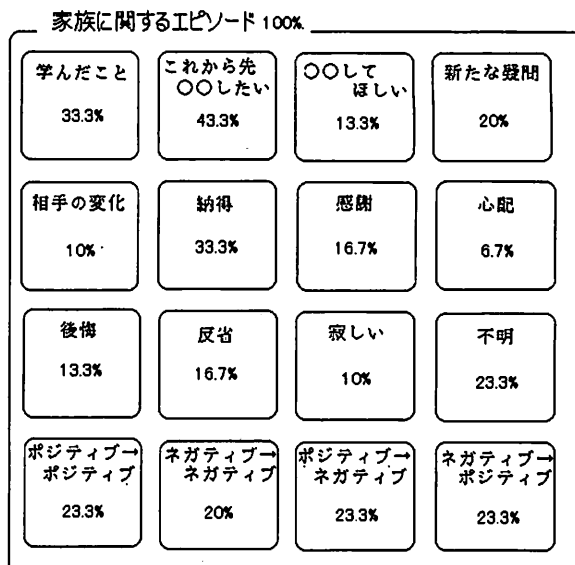


図 7 FITにおける「家族に関するエピソード」への気づき

表 4 「家族に関するエピソード」の下位分類の用語についての説明

「学んだこと」 エピソードを通して新しく学んだことについて記述したもの	「これから先〇〇したい」 エピソードを通して自分がこれから先どうしたいかについて記述したもの	「〇〇してほしい」 エピソードに携わった相手に対しての要求を記述したもの	「新たな疑問」 エピソードについての疑問を記述したもの(例:「なぜ自分はあんなことを言ったのだろう」)
「相手の変化」 エピソードの後、エピソードに携わった相手が変わっていることを記述したもの	「納得」 エピソードが起こったことに関して納得しているもの(例:あのときはそうするしかなかったと思う)	「感謝」 エピソードを通して家族に対する感謝を記述したもの	「心配」 エピソードに携わった相手を心配しているもの
「後悔」 エピソードに関する心残りを記述したもの	「反省」 エピソードが起こった当時の自分の行動を反省しているもの	「寂しい」 今後同じようなエピソードがもう二度とないことに対する寂しさと記述しているもの(例:もうこんなことは二度とないと思うと寂しい)	「不明」 感情が記述されていないもの
「ネガティブ→ポジティブ」 以前はネガティブな感情を持っていたが、現在はポジティブに捉えているもので、あまり深く記述されていないもの(例:当時は悲しかったが、今はよかったです)	「ポジティブ→ネガティブ」 以前はポジティブな感情を持っていたが、現在はネガティブに捉えているもので、あまり深く記述されていないもの(例:当時はよかったが、今は寂しいと思う)	「ネガティブ→ネガティブ」 以前も今もエピソードをネガティブに捉えているもので、あまり深く記述されていないもの(例:当時は悲しかった、今も悲しい)	「ポジティブ→ポジティブ」 以前も今もエピソードをポジティブに捉えているもので、あまり深く記述されていないもの(例:当時はうれしかった、今もうれしい)

になった)の項目で、FITでは3.3%、KFDでは16.7%が記述していた。「家族内での家族メンバーの位置づけ」について記述していたものは、両技法ともに同数であった(KFD86.7%、FIT86.7%)。その下位分類では、「自分」(家族の中での自分の位置づけについて記述しているもの)の中の「行動」(家族の中での自分の位置づけについて行動を中心に記述しているもの)において、FITでは6.7%、KFDでは26.7%が記述していた。また、「自分」の中の「ネガティブ」(家族の中での自分の位置づけについてネガティブに記述しているもの)では、FITの方がKFDよりも多く記述していた(KFD6.7%、FIT30%)。

「希望・予測」(相手や自分に対して希望や予想を記述しているもの。例:「私は将来両親のようにはなりたくない)についての記述が両技法で数名みられた(KFD20%、FIT16.7%)。その下位分類では、「今」(現在の相手や自分に対して希望や予想を記述しているもの)と「将来」(将来の相手や自分に対して希望や予想を記述しているもの)に分けられ、なかでも「将来」に関する記述では、FITよりもKFDの方がわずかに多かった(KFD16.7%、FIT6.7%)。

2. 心理アセスメント法としての動的家族画と家族イメージ法

心理アセスメント法としてのKFDとFITの違いを明確にするため、両技法から読みとることのできる家族の特徴についてまとめた。

1) 動的家族画の描画内容の分類

KFDでは、対象者によって異なった家族の場面が表現されていた。そこで、描画がどのような場面を表現しているのかを分類した(表5)。

対象者のほぼ全員が、家族メンバーが全員そろって登場している「集合」場面を描いていた(86.7%)。ま

た、家族が全員そろっていることに加えて、家族メンバーの役割が明確になっているものが13.3%みられた。いずれの場面も家族の日常的場面が描かれていた。

表5 KFDの内容の分類

分類(大)	分類(小)	割合
集合 86.7%	団らん	26.7%
	食事	23.3%
	ドライブ	10%
	睡眠	10%
	旅行	6.7%
	散歩	3.3%
	外食	3.3%
	遊び	3.3%
役割 13.3%	食事の準備	6.7%
	掃除	3.3%
	肩車	3.3%

2) 動的家族画と家族イメージ法から読みとることのできる家族の特徴

両技法で表現された内容を詳細に分析し、それぞれが示す家族の特徴について分析した。分析項目の中で両方に共通してみられる項目に「距離」と「向き」がある。FITにおける「距離」は図8のように、シール間の距離を0.1cm単位で測定したものを指す(図8)。これは心理的距離(対象者が感じている関係の親密さ)を表している。「距離」がもつ意味は対象者に直接教示されないため、無意識的な心理的距離(対象者が感じている関係の親密さ)が表現されやすいとされている。

また、図9のようにKFDにおける距離もFITと同様に家族メンバー間の距離を示すが、FITのように数量的な測定が意味をもつのではなく、他の人物との距離との対比から、親密性といった家族力動が読みとられてきた(日比, 1986)。

FITにおける「向き」は、シールに描かれている矢印(△や▲)がど

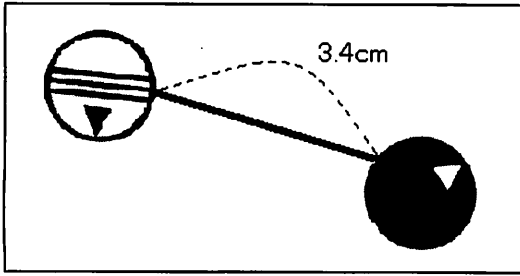


図8 FITにおける距離

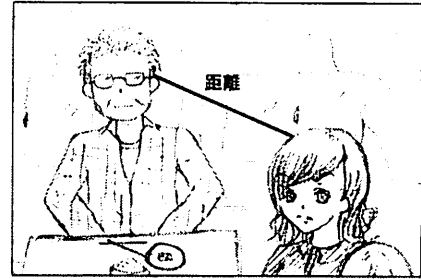


図9 KFDにおける距離

の方向を向いているかによって評定され、その家族メンバーが関心を向けている方向が表されているとされている。「向き」のもつ意味は、FIT作成時に対象者に教示されている。そのため、対象者は意識的に「向き」を決定することができる。

一方、KFDにおける「向き」は、主に家族メンバーの視線や身体が向いている方向から読みとられる。これまでの研究ではKFDの「向き」からは「距離」同様、親密性を含む家族力動が読みとられてきた。

このようにKFDとFITでは同じ分析項目であっても、それらの刺激構造に違いがある。この場合、同じような項目であってもKFDで表現された場合とFITで表現された場合では同じ意味をもたないと考えられる。そこで、心理学を専攻している大学院生2名を評定者として用い、KFDやFITの主に「距離」や「向き」からどのような家族の特徴が読みとることができるかを評定した。

①「距離」について

KFDについて評定した結果、「距離」から主に「家族のまとまり」（家族が全体としてまとまりをもっているか）、「家族メンバーの役割」（家族メンバーがどのような役割を担っているか）、「欲求」（家族メンバーがどのような欲求を抱いているか）が読みとられた。そこで、これらの結果が読みとられたKFDと同一対象者が作成したFITについて事例を示した。

a) KFDの「距離」が「家族のまとまり」を意味していると評定された

事例

KFDの「距離」によって「家族のまとまりがある」と評定された事例を示した。

図10-1は、事例A（男性）が作成したKFDであり、Aが幼稚園から小学校の時期に家族全員で寝ている場面が描かれた。「家族のまとまりがある」と評定された理由は、主に「距離」の近さが理由に挙げられた。妹が父親を蹴っているが、これによって父親と妹は身体的な接触があり、距離が近い。Aは家族メンバーがいる方向には向いていないが、父親の手がAの肩にかかっていることから距離が近い。これは「Aと妹は父親のいびきをうっとうしいと感じているが、父親に対してネガティブな感情を抱いているとは考えにくい。それは描画中で個々の動きが細かく表現され、『温かい家族』という印象を受けるためである」と評定された。さらに、家族が画用紙全体に描かれ、お互いの距離が比較的近く表現されていた。このことも「家族にまとまりがある」と評定された理由であった。

図10-2は、Aが作成したFITである。全員が「強い結びつき」を表す太い線で表されており、全体的に「距離」も近い。このことから「家族のまとまりがある」と評定された。

次に、KFDの「距離」によって「家族のまとまりがない」と評定された事例を示した。

図11-1は事例B（男性）が作成したKFDであり、本人が幼稚園の頃に家族全員で寝ている場面が描かれた。

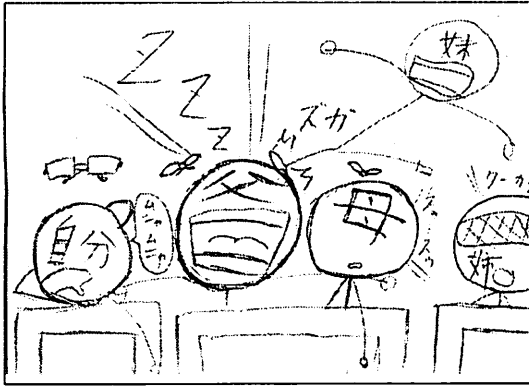


図 10-1 事例 A (男性) が作成した KFD (左から自分, 父親, 母, 妹, 姉)

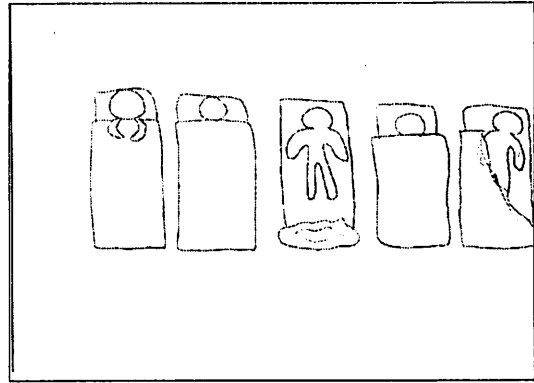


図 11-1 事例 B (男性) が作成した KFD (左から父親, 母親, 本人, 長女, 次女)

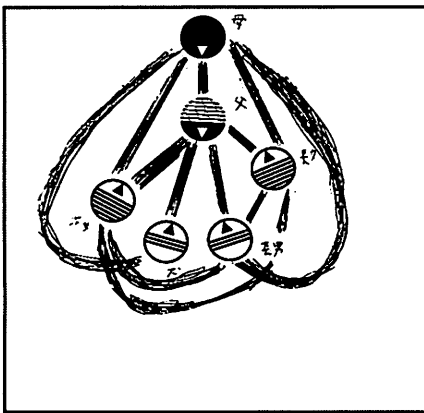


図 10-2 事例 A (男性) が作成した FIT

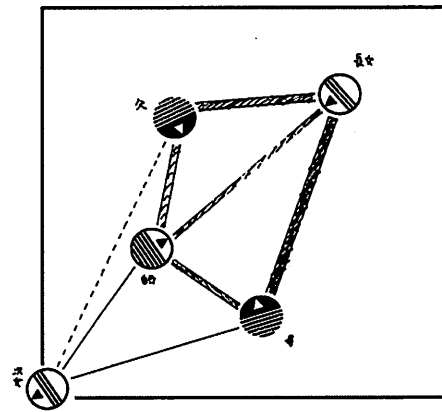


図 11-2 事例 B (男性) が作成した FIT

家族同士の身体的接触がなく、等間隔に配置されていることから「表情が描かれておらず、全体的に対象者の家族に対する親密さが感じられないため、家族同士の距離が家族にまとまりがないことを象徴しているように思われる」と評定された。

図 11-2 は B が作成した FIT である。「家族全員が互いに距離があり、まとまりがないようにも思えるが、父親、母親、長姉(長女)、本人の結びつきを表す線は太いため、しっかりとまとまっている」と評定された。また、次姉(次女)が枠外にはみ出しており、家族から外れていると評価されたが、この点は KFD では読みとれなかった。

b) KFD の「距離」が「家族メンバーの役割」を意味していると評定された事例

図 12-1 は事例 C (女性) が作成し

た KFD であり、現在の C が食事の準備を手伝っている場面が描かれた。女性 3 人が互いに近い距離で食事の準備をしており、男性 2 人が互いに近い距離で自分の好きなことをしている。このことから、女性 3 人は食事の準備を「役割」としていることが読みとられ、男性 2 人はそれに携わらない人物であると評定された。

図 12-2 は C が作成した FIT である。「距離」は家族全員が近い位置に配置されており、「家族のまとまりがある」と評定された。しかし、「家族メンバーの役割」については、FIT のどの分析項目からも読みとれなかった。

c) KFD の「距離」が対象者の「欲求」を意味していると評定された事例

図 13-1 は事例 D (男性) が作成し

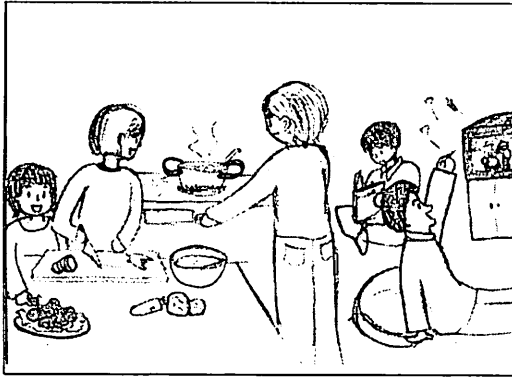


図 12-1 事例 C (女性) が作成した KFD
(左から妹, 本人, 母親, 兄, 父親)

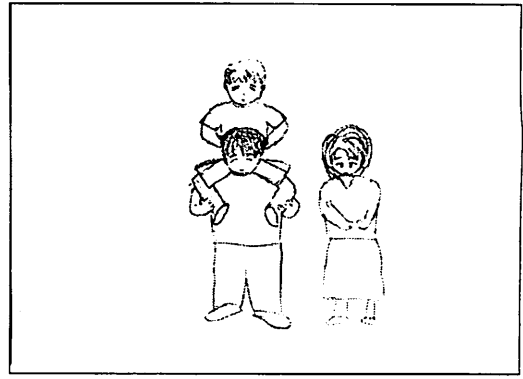


図 13-1 事例 D (男性) が作成した KFD
(左上が本人, 左下が父親, 右が母親, 姉は描かれていない)

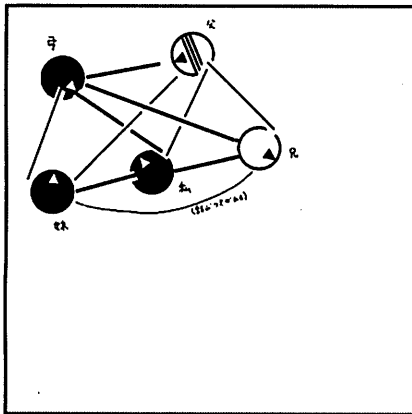


図 12-2 事例 C (女性) が作成した FIT

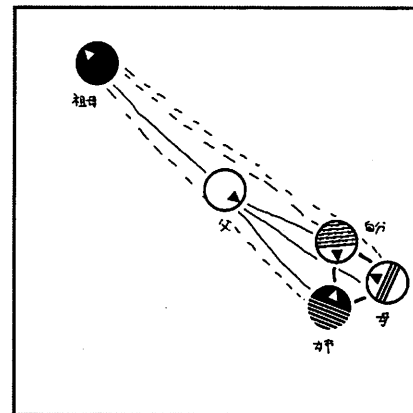


図 13-2 事例 D (男性) が作成した FIT

た KFD であり, D が幼稚園時代に父親に肩車をしてもらっている場面が描かれた. 父親と本人には身体的な接触があり, 「距離」が近い. しかし, 「D が幼稚園の頃を描いているため, 近年では描画のように父親と近い距離で接する機会はない, または少ない可能性がある」と評定された. このことから父子の距離は D の「父親と親しい関係を結びたい」といった「欲求」が表れている可能性がある」と判断された.

図 13-2 は D が作成した FIT である. ここでの「距離」からは「本人, 母親, 姉の 3 人の距離が近く, まとまりがある」と評定されたが, 「父親は 3 人から距離があり, 家族のまとまりから少し出ている」と評定された. KFD で読みとられた「欲求」は, FIT のいずれの分析項目からも読みとられなかった.

② 「向き」について

KFD の「向き」から, 主に「関心の有無とその意味」(関心があるかないか, ある場合にはどのような意味をもっているか), 「家族のまとまり」が読みとられた. そこで, 典型的な KFD と同一対象者が作成した FIT について事例を示した.

a) KFD の「向き」が「関心の有無とその意味」を意味していると評定された事例

図 14-1 は事例 E (男性) の作成した KFD であり, 中学生の E が家族でトランプをしている場面である. この KFD では父親のみがトランプに参加しておらず, 他の方向を向いている. これは「父親はトランプをしている家族に関心を向けていない」と評定され, 父親の関心のなさが読みとられた. 一



図 14-1 事例 E (男性) の作成した KFD
(左から父親, 本人, 長妹, 母親, 次妹)

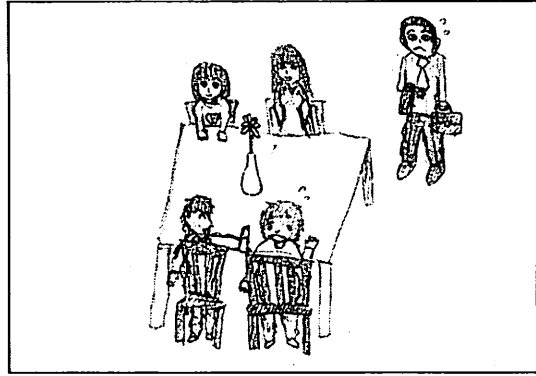


図 15-1 事例 F (男性) の作成した KFD
(上段左から妹, 母親, 父親, 下段左から本人, 弟)

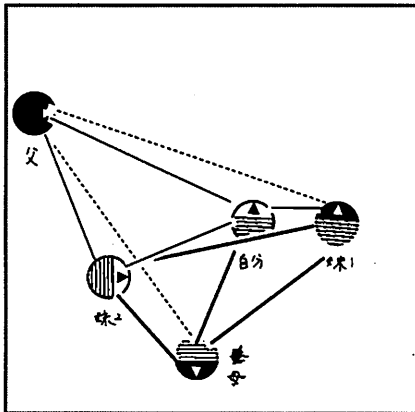


図 14-2 事例 E (男性) の作成した FIT

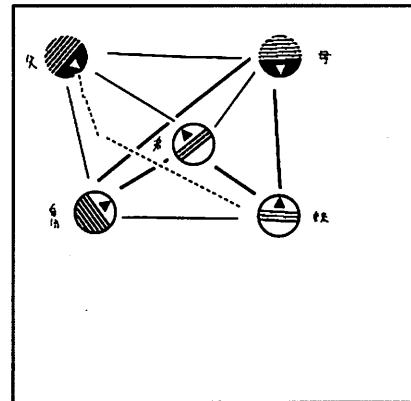


図 15-2 事例 F (男性) が作成した FIT

方、「本人と次妹（次女）はトランプをしつつも、視線が父親の方を向いているように見える」と評定されたことから「本人と次妹（次女）は父親に関心を向けている」という「関心の有無」とともに、「一緒にやってほしい」という願望や「どうして参加しないのか」という疑問も読みとられた。

図 14-2 は E の作成した FIT であり、家族メンバーが思い思いの方向を向いていた。特に母親が家族以外に関心を向けており、父親は家族の方向を向いていた。しかし、その方向が何を意味しているのかは読みとられなかった。

b) KFDの「向き」が「家族のまとまり」を意味していると評定された事例

図 15-1 は事例 F (男性) が作成した KFD であり、現在の F が家族とと

もに父親の帰りを待っている場面である。ここでは「Fと弟が話しているところを他の家族メンバーが見守っており、家族全員が同じところに向いている」と評定された。また、この KFD から温かい家族の雰囲気を読みとられたことも合わせて、F の家族は「家族のまとまりがある」と評定された。

図 15-2 は F が作成した FIT である。ここでの「向き」は、家族全員が同一方向を見ているのではなく、それぞれの家族メンバーが誰かを見ているという表現がなされている。このことから「個々のつながり」を読みとることはできたが、「向き」から「家族のまとまり」は読みとられなかった。

IV 考察

1. 動的家族画と家族イメージ法によ

る気づきについて

1) 「家族メンバーの特徴」について

KFD と FIT のいずれにおいてもほぼ全員が「家族メンバーの特徴」についての気づきを得ていた。「家族メンバーの特徴」は対象者が気づきやすい項目であり、技法による違いはほとんどないと思われる。

「家族メンバーの特徴」の中でも特に「自分の思いなし」では、両技法ともほぼ全員が気づきを得ていたが、「自分の思いあり」について記述している対象者は両技法とも少数であった。このことから、対象者は「家族メンバーの特徴」について自身がどのように思っているのかという気づきをほとんど得ていなかったと思われる。いずれの技法でも自分自身に目を向けるよりも家族に目を向けることが多く、自分の思いにまでは気づきが深まらなかったためと推察される。

同様の理由で、「自分自身」に関する気づきについても、KFD では 20%、FIT では 46.7% と半数に満たなかったものと思われる。しかし、FIT の方が「自分自身」に関する気づきは多く、特に自分の「パーソナリティ」への気づきが多かった。KFD では、描く場面によっては、気づきが深まりやすい家族メンバーとそうでないメンバーがあり、「自分自身」に関しても気づきを得られにくいものと思われる。一方、FIT では「シールの色」を選ぶ際に、家族メンバーと同程度に自分について考える機会があることから、KFD よりも「自分自身」に関する気づきが増え、しかも自分の「パーソナリティ」に対する気づきが促されやすいと考えられる。

2) 「関係性」について

「関係性」については、両技法とも全員が記述しており、比較的気づきやすい項目であると思われる。中坪ら (2006) は、FIT では教示から作成後までの全過程で、対象者は関係性について考えることが多いことを明らか

にした。本研究でも中坪ら (2006) の研究を支持する結果が得られた。また、KFD においては家族の「集合」場面が描かれやすく、家族の関係が意識されることも多かったことから、「関係性」についての気づきを得られやすかったものと思われる。

「関係性」の中でも「自分と家族メンバーの関係」については、両技法とも全員が記述していた。このことからいずれの技法もおのずと自分と家族の関係性を考えさせるものであると考えられる。また、「自分と家族メンバーの関係」の中でも「家族の思いの推察」の下位分類において、KFD では「分からない」が数名にみられた。これは、対象者が過去の場面を描写しても、そこに示された関係性について家族がどう思っていたのかまでは推察できないこともあるため、主に現在が表現される FIT とは異なり、KFD では「家族の思いの推察」をしても「分からない」と回答されたのではないかと思われる。

「関係性」の中で 2 番目に多くみられた項目は「両親の関係」であり、特に「関係の二面性」は KFD よりも FIT の方が多かった。KFD ではある特定の場面における両親を描くことが多いため、両親の関係の一側面にのみ目が向きやすいものと思われる。一方、FIT では両親の「シールの色」や「シール間の線」を選ぶ際に、関係性を総合的あるいは多角的に検討することが求められるため、両親の関係性の様々な側面を捉えることが可能になると考えられる。

「両親の関係」の「ネガティブ」な側面については、FIT よりも KFD で多く記述されていた。両親の関係を総合的・多角的に考えさせる FIT では、いずれの側面も意識されやすいが、特定の場面を想起させる KFD では、描かれた内容によって意識化される側面が限定されやすいことが考えられる。よって、KFD は「ネガティブ」な

場面を想起しやすい技法である可能性も示唆されるが、この点についてはより多くの被検者を用いた研究が必要になると思われる。

3) 「家族に関するエピソード」について

「家族に関するエピソード」については、両技法ともにほとんどの対象者が気づきを得ていた。これはいずれの技法も家族関係について幅広い気づきを促しやすいことを示唆している。

「家族に関するエピソード」の中でも、エピソードを通して得た教訓や将来の展望に関する記述（「学んだこと」、「これから先〇〇したい」）が多かった。これは、これらが自分自身の変化につながった印象的なエピソードであり、想起しやすかったためと思われる。KFD や FIT によって、こうしたエピソードを思い出すことは、家族の中で学んだ経験を再認識したり、捉えなおしたりする機会を与えることになるとと思われる。

4) その他の分類

「家族全体の特徴」については、KFD よりも FIT の方が記述しているものがわずかに多かった。半構造的な刺激をもつ FIT では、家族全員のイメージを作成することが求められるが、KFD では非構造的な刺激により家族全員が登場しないこともあるため、「家族全体の特徴」が記述されにくいと考えられる。また、下位分類の家族「全体」の「変化」については、FIT よりも KFD の方が多く記述されていた。KFD では現在だけでなく、対象者が幼い頃の場面が描かれる場合もあるため、主に現在の家族について表現される FIT よりも家族の「変化」が注目されやすいものと思われる。

「家族内での家族メンバーの位置づけ」について記述した対象者は、両技法とも多くみられた。これは KFD では具体的な状況を描くことで、家族の役割が意識されやすく、FIT では「シールの色」や「シールの高さ」に家族

メンバーの位置づけが表されるため、それぞれの位置づけが視覚的になりやすいものと思われる。また、下位分類の「自分」の「行動」については、FIT よりも KFD で多くの気づきを得られていた。これは、FIT で意識されやすい位置づけは主に教示が与えられる「シールの色」の差異によって表されるものであり、家族内での発言力や影響力を指すことが多いが、KFD では具体的な場面を描くことにより、「行動」に注目した位置づけに目が向きやすいためと考えられる。さらに、下位分類における「自分」の「ネガティブ」な側面については、KFD よりも FIT で記述されることが多かった。原田 (2005) の研究では、アイデンティティが未確立であるものほど、FIT を作成した大学生本人の「シールの色」は薄くなっていた。これはアイデンティティが確立していないものほど、家庭内で自分の発言力や影響力がないと感じていることを示唆している。このことから、アイデンティティを模索している時期にある大学生が FIT を作成することで、現在の家族における自分の位置づけについても「ネガティブ」な側面が意識されやすかったことが推察される。

5) 動的家族画と家族イメージ法による気づきについてのまとめ

以上の考察を踏まえて、KFD と FIT によって得られる気づきの異同についてまとめた。

KFD と FIT による気づきの基本的な内容には違いがなく、その意味では、いずれの技法も心理面接において単体で用いても、家族に関する様々な気づきを促すことが可能であると思われる。

また、半構造的な課題である FIT では、教示された項目にしたがって気づきが得られやすく、反対に非構造的な課題である KFD では、気づきが様々な側面に広がりやすいことが示唆された。この特徴を踏まえて心理面接に

おける両技法の使い分けが可能になると考えられる。例えば、セラピストが意図して、何らかの家族の特徴をクライアントに気づかせたいと考えている場合には、FITがより適しているものと思われる。一方、セラピストがクライアントから家族に関して多くの話題を引き出したい場合には、KFDがより適していることが考えられる。

さらに、KFDで得られた気づきの中には、以前はネガティブな感情を抱いていたが、現在はポジティブに捉えなおしているエピソード(図6, 7:「ネガティブ→ポジティブ」KFD36.7%, FIT23.3%)など、表現された場面の時制が様々であることによって生じたと判断されるものがあった。一方、FITでは現在の家族イメージが作成されることが多いため、「ネガティブ→ポジティブ」のような捉え方の変化に対する気づきは少ない傾向にあった。よって、FITよりもKFDの方が過去、現在、将来にわたる幅広い時制における気づきを促しやすいことが考えられる。

2. 心理アセスメント法としての動的家族画と家族イメージ法

1) KFDの描画内容

KFDに表現された場面について分類した結果、ほとんどの対象者は家族全員が登場する「集合」場面や家族の「役割」が表現されている場面を描いていた。

高橋(1987)は、家族画では居間が描かれ、炬燵で話し合ったり、テレビを見ている場面が描かれやすいと述べているが、本研究でも「団らん」や「食事」などの日常場面が多く描かれ、KFDの基本的特徴を有した描画が多くみられた。

2) KFDとFITから読みとることのできる家族の特徴

①「距離」について

a) KFDとFITの「距離」から読みとられた「家族のまとまり」に

ついて

事例AのKFD(図10-1)で、妹が父親を蹴っていることやAが父親の方向を向いていないことは、父親に対してネガティブな感情を抱いているとも捉えられる。しかし、いずれも身体的接触があることから、「父親へのネガティブ感情は一時的なものであり、基本的には『まとまりがある家族』が描かれている」と評定された。これによって「家族のまとまりがある」だけでなく、それがどのような内容のものであるかが詳細に読みとられたと考えられる。よって、KFDにおける「距離」は「家族のまとまり」とその詳細を明らかにするために重要な項目であると思われる。しかし、FIT(図10-2)では、「距離」や「シール間の線」から「家族のまとまりがある」と評定されたが、それ以上の詳しい内容は評定できなかった。

事例BのKFD(図11-1)では、「距離」から「家族のまとまりのなさ」とその詳細が評定された。しかし、FIT(図11-2)では、「距離」によって「家族のまとまりがない」と評定されたものの、「シール間の線」の太さからは姉(次女)を除く4人にはまとまりがあると評定された。「家族のまとまり」に関して具体的な状況は把握できなかったが、家族の力動関係を端的に表していると思われる。

以上の事例から、KFDでは「距離」を主とした様々な描画特徴を手がかりに「家族のまとまり」と、その具体的な状況を読みとることが可能であると思われる。一方、FITでは「家族のまとまり」の詳細は読みとることが難しいと考えられる。しかし、言い換えると「家族のまとまり」の有無が直接的に読み取られると考えられる。

b) KFDとFITの「距離」から読みとられた「家族メンバーの役割」について

事例Cが作成したKFD(図12-1)の「距離」によって、女性3人は食事

の準備を「役割」としており、男性 2 人はそれに携わらない人物であることが読みとられた。ここでは特にそれぞれがどのような役割であるかが具体的に示されたものと思われる。しかし、FIT (図 12-2) では、「家族メンバーの役割」について、どの分析項目からも読みとることができなかった。

「家族メンバーの役割」が KFD では読みとられ、FIT では難しかった理由として、刺激構造の違いがあると考えられる。FIT では教示が明確に与えられるために、その項目に関しては確実に表現されるが、直接的に教示されない「家族メンバーの役割」について考える対象者は少ないものと思われる。しかし、KFD では家族の行動が描かれるため、FIT よりも「家族メンバーの役割」を具体的に読み取りやすいと推察される。

c) KFD と FIT の「距離」から読みとられた「欲求」について

事例 D が作成した KFD (図 13-1) では、「距離」の近さから「父親と親しい関係を結びたい」といった「欲求」が表れている可能性が読みとられた。しかし、FIT (図 13-2) ではどの分析項目からも「欲求」は読みとられなかった。こうした結果が得られた理由も、KFD と FIT の刺激構造の違いにあると思われる。すなわち、FIT では表現される家族力動が限定されるため、「欲求」は読み取りにくい。KFD では自由度の高い教示によって無意識的な「欲求」が描画の中に表現される可能性が高いと考えられる。

② 「向き」について

a) KFD と FIT の「向き」から読みとられた「関心の有無とその意味」について

事例 E の作成した KFD (図 14-1) では、父親の関心が家族に向いていないことや、E と妹 (次女) は父親に関心に向けており、父親に対する願望や疑問も読みとられた。一方、FIT (図 14-2) では、家族が思い思いの方向

を向き、母親は家族以外に、また父親は家族の方向に関心に向けていたが、その方向が何を意味しているのかは読みとられなかった。KFD で読みとられた関心に向けている意味について、FIT では読みとられなかった理由として、FIT では具体的な状況が表現されないことが考えられる。FIT では家族メンバーが家族の方向を向いていないとしても、その意味を読み取る手掛かりが少ない。しかし、KFD では「向き」だけでなく、家族メンバーの表情や行動などから具体的情報を得ることができるため、家族力動を推察することが容易になるとと思われる。

b) KFD と FIT の「向き」から読みとられた「家族のまとまり」について

事例 F が作成した KFD (図 15-1) では「家族のまとまりがある」と評定され、その詳細が読みとられた。しかし、FIT (図 15-2) では「個々のつながり」を読みとることはできたが、「家族のまとまり」は読みとられなかった。これまでの FIT 研究では、「向き」が内向きであること (家族の方向をむいていること) は家族のまとまりと相関があるとされてきた (柴崎ら, 2001) が、外向き (家族以外の方向を向いている) であることが必ずしも家族への関心のなさを示しているわけではない。中坪ら (2006) によると、FIT の作成過程でクライアントにはさまざまな迷いが生じ、作成された図にはクライアントなりの妥協も含まれているとされている。また、シールの性質上「向き」を必ず一方向に向けなくてはならないため、FIT 作成時に F の中にも迷いや妥協が生じていた可能性がある。現実には F の家族が FIT で示されたように一方向だけに向いているとは限らない。よって、FIT の「向き」からは「家族のまとまり」が読みとりにくいことが推測される。

3) 心理アセスメント法としての KFD と FIT に関するまとめ

KFD と FIT を心理アセスメントで用いる際の長所と短所を以下のようにまとめた。

非構造的な刺激をもつ KFD では、教示が具体的でないために、表現される場面が対象者の自由に任されることや家族の具体的な場面が描かれることから、多様な家族の特徴が読みとりやすいと考えられる。しかし、家族のある一場面が描かれるため、家族の基本的な力動性を把握できるとは限らない。

一方、FIT では表現される家族力動がある程度決まっているために、基本的な家族の特徴に関しては確実に読みとることができる。特に作成された家族イメージは家族力動を端的に表しており、評定も容易であった。しかし、このような刺激構造のために KFD で読みとられたような具体的な家族の特徴を読みとることは難しいものと思われる。

以上のような KFD と FIT の特徴を相補的に活かすことで、これらの技法をテストバッテリーとして組むことができそうである。すなわち、FIT を用いて家族の基本的な特徴を確実に把握し、その詳細とクライアントの家族の独自性を理解するために KFD を用いるという方法が可能であると思われる。

V まとめ

本研究では、KFD と FIT の刺激構造の違いに注目し、両技法によって得られる気づきの特徴を整理することで、心理面接における活用のあり方について検討した。その結果、KFD と FIT によって得られる気づきの内容にほとんど違いはみられなかった。よって、どちらの技法も心理面接において単体で用いても家族に関する様々な気づきを得ることができるとと思われる。

また、KFD に比べて FIT の方が気づきの内容が限定されやすいことや、

FIT よりも KFD の方が過去から将来にわたる幅広い時制における気づきを促しやすいことが示唆された。これらの特徴から、心理面接における両技法の使い分けが可能になると考えられる。

また、KFD と FIT から読みとれる家族の特徴の異同を明らかにし、テストバッテリーとしての可能性について検討した。その結果、KFD では、多様な家族の特徴が具体的に読みとりやすいことがわかったが、家族のある特定の場面が表現されるため、家族の基本的な力動性を把握できるとは限らない。一方、FIT では、基本的な家族の特徴に関してより確実に読みとることができる。しかし、具体的な家族の特徴を読みとることはできなかった。

以上のような KFD と FIT の長所と短所を相補的に活かすことで、テストバッテリーとして用いることが可能であることが示された。

引用文献

- 秋丸貴子・亀口憲治 1988 家族イメージ法による家族関係認知に関する研究 家族心理学研究, 15 (2), 61-74.
- Burns, R. C. & Kaufman, S. H. 1970 *Kinetic family drawings (K-F-D): An introduction to understanding children through kinetic drawings*. Brunner / Mazel.
- Burns, R. C. & Kaufman, S. H. 1972 *Actions, styles and symbols In kinetic family drawings (K-F-D). An international manual*. Brunner / Mazel. (加藤考正・伊倉日出一・久保義和訳 1975 子どもの家族面診断 黎明書房)
- 原田雪子 2005 家族イメージ法で見る大学生の家族イメージについての一研究—アパシー傾向・アイデンティティ確立との関連から—

- 2005 年度徳島大学総合科学部人間
社会学科卒業論文 未刊行
- 日比裕泰 1973 K-F-D の研究 (1)
— その紹介と登校拒否の場合 —
日本心理学会第 37 回大会発表論文
集 318-319.
- 日比裕泰 1986 動的家族描画法
(K-F-D) — 家族画による人格理解
— ナカニシヤ出版
- 亀口憲治 2003 FIT (家族イメージ
法) マニュアル システムパブリカ
- Kveback, D. 1980 *The Kveback
Family Sculpture Technique.*
Jonesboro: Pligrimage.
- 中坪太一郎・新谷侑希・坂口健太・塩
見亜沙香・亀口憲治 2006 東京大
学大学院教育学研究科紀要, 46,
227-238.
- 柴崎暁子・丹野義彦・亀口憲治 2001
家族イメージ法のプロトコル分析
と再検査信頼性の分析 家族心理
学研究, 15(2), 141-148.
- 高橋依子 1987 大学生の家族画 —
再テストを中心として— 臨床描
画研究, II, 27-42.
- 植村徳治 1989 小学校における動
的家族画 (K-F-D) の実際 臨床描
画研究, IV, 181-200.

付記：本研究は、2007 年度に徳島大
学大学院人間・自然環境研究科（臨
床心理学専攻）に提出した修士論文
を一部加筆・修正したものである。
研究にご協力くださいました学生
の皆様に、心から感謝申し上げます。

(受付日2009年9月30日)

(受理日2009年10月22日)

